
抜魔師物語(えくそしすとすとりー)【第二巻】

神崎 冥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

えくそしすとすとーりー

被魔師物語【第二巻】

【Nコード】

N4525W

【作者名】

神崎 冥

【あらすじ】

被魔師育成学園「私立安心院学園放課後塾」は、その名の通りに「放課後」に「塾」としてやっていた。その、安心院学園の敵は「悪魔」だった！！

ヨハネの黙示録の四騎士や七つの大罪を敵にし、学園生は今日も戦う！！

エピソード2

【エクソシスト（Exorcist）とは。
キリスト教、特にカトリック教会の用語でエクソシスムを行う人の事。

エクソシスムとは誓い、厳命を意味するギリシャ語であり、洗礼式の時に悪魔を捨てる誓約があるが、その後に悪魔にとりつかれた人から、悪魔を追いつ出して正常な状態に戻すことを言う。

かつてはカトリック教会の下級叙階の位階の一つとして存在し「^{つまし}被魔師」と訳されたそうだ。

また、日本の神道用語が転用されたことがあるが、キリスト教と神道は異なる宗教であり、まったく別概念である。

コレは、その様な事柄を使った物語である。
しかし、上記とはやや異なる事になろう。

そんな、被魔師の物語

第一話

今日もいつも通りの日程で、いつも通りの日々を送っている。

俺の名前は、「志具原扇^{しけいはん}」。私立安心院学園放課後塾の生徒だ。

得意な事は、料理と喧嘩！苦手な事は、勉強！！科は、接戦科^{アサルト}！！
！武器は、三種の神器の「草薙剣^{くさなぎのつるぎ}」！！！！！！

そんな俺は今夢の中……

アルト「起きんかい、このバカたれ！！！」

バシッ！！

扇「つてええ！！行き成りなにすんだよ！？」

アルト「なにすんだよ！？じゃねえよ！！！！今、授業中だろ！？」

扇「てへっ」

アルト「てへっ、じゃねえ！！！！いいから、廊下に立ってろ！！」

くっそう……

展開が行き成りすぎて悪いが、俺は今授業中に居眠りをしていたのだ。

ちなみに今は、俺たちの教師の「小鳥遊アルト（たかなしあると）」。一々五月蠅いババアだ。

勇「元気やなあ…」

コイツは、俺のクラスメイトの「藤勇^{ふじいぐれ}」。
^{アドム}装備科で、武器が好物な野郎。一応、出身地は京都らしい。

克「元気ちゃうって。アイツはただのバカなだけ」

今の言葉は聞き捨てならんな！！！！

この、生意気な精神的ハゲも俺のクラスメイトで「時雨克^{しぐれかつみ}」。
^{スナイプ}射撃科で、武器は弓矢。任務とかで見たけど、結構力ツコイイ武器
だった！

聞けば、藤にカスタマイズしてもらったとか。

アーサー「また、立たされているのか」

扇「アーサー！」

コイツは、「アーサー」。なんか、ヴァチカン最強の騎士で、聖
剣「エクスカリバー」つつう奴の所持者らしい。
まあ、俺には価値は分かんが、凄いらしい。

アーサー「いい加減、その癖直せ」

扇「うるせー」

どうやら、今の流れを見ていたらしい。

こんなのは、珍しい事もなく毎回立たされている。

はあ…毎度毎度面倒だぜ……だって、眠いんだから仕方がねえだろ
！！

アーサー「それだから、」

とかほざきながら、どこかへ行つた。

何しにきたんだ、アイツ！！

アルト「あにゃー、アーサーやつさしー」

扇「うおっ！？アルト！？なぜ、廊下に！？」

アルト「アルト先生…だろ？……お前が五月蠅いからに決まってる
だろ！大声で喋んなし！」

まあ、俺の日常はそんな感じだ。

アルト「おい、コイツ聞いてんのか？」

第二話

扇「はあ…散々だったぜ……」

勇「まあ、さつきのは志具原くんが悪かったんちゃう？」

克「そや」

扇「ウゼー、お前等、俺を励ましにきたんじゃないやなくて、貶しにきたんか」

一応、俺たち生徒はこの三人だけ。

いや…生徒って言うかチーム。この学校。チームで一クラス作るもんだから中々広いんだよ。

放課後にやってる塾なのに。ちゃんとチャイムも鳴るし、休憩もあるし…

アルト「おーい、お前等。行き成りだけど特別授業に行ってもらう」

よく、コイツは特別授業とか行つて。

任務板から、依頼を取ってくる。任務はある程度揃っていたらやつてもいい。

任務にはある程度の難易度とかがあってその難易度に従って、貰う金も違うのだ。

一応、保険かけてるから大丈夫。

勇「特別授業って何ですか？……まさか」

その、まさかだと思う……

アルト「そ。よろつと、任務行ってきてちょ」

扇「はああ、マジか？」

アルト「お前は黙れ どうせ、こつ言つ事でしか点数取れねえくせに」

扇「何気にひどっ!!」

俺主人公ぞ!?

コイツ…完全差別とやらをしてるだろツ!?

アルト「まあ、とにかく。任務を教えるぞ。ほら」

と、アルトは黒板にはる。

克「パトロール…ですか？」

勇「よかったあ…危なくない任務で……」

落ち着く、藤は任務の紙をまだ見ていない。
任務の紙を見に行く。

扇「ん…？せいおかのざん星丘之山……なにソレ？近くの山？？」

勇「ええ！！？」

扇「ぬわっ！？なにいきなり叫んでんだよ！！」

吃驚した…

コイツ、行き成り何なんだよ

勇「星丘之山って、アノ！？」

アルト「まあな」

克「先生！ソレって、少し危険じゃないですか？？」

ん…？

意味が分からんな。

扇「なにソレ…?？」

アルト「はぁ…やっぱりか…」

克「お前分からへんのか!!?」

勇「あんなに有名なになぁ…」

苦笑いする藤。

意味が分からん……

第三話

アルト「おい、藤。お前、教えてやれ」

勇「はい」

そして、藤は言う。

勇「星丘之山は、最近妖が出るって噂があるんですよ」

扇「妖？…妖怪の事か」

勇「はい。そんでですねえ。その妖が、人間をとって喰ってしまうって言う噂があるんです。一応、捜査にいかはったらいいんですけど、その捜査員も手にかけれなくて…食べられてしもたって人もおるんですけど、殺そうとしたら殺される。ほんで、速くて体なんの妖なのかも分からへん。それに、まーりの妖を操っとるさかい、姿は中々現さないんです。」

扇「へえ」

そんな山をパトロールするのか……

依頼者は何を考えているんだ！！？ココの生徒を殺す気か！！

アルト「まあ、そんな所だ」

扇「そんな所だ、じゃねえよ！！お前ッ、殺す気か！」

克「だろ！？困ったもんやわ！！」

アルト「ふっ、この意気地なしどもめ」

いやいやいや！！

意気地なしも何も！！？

扇「ちょ、おまっ」

アルト「いいから、順番決めてちゃっちゃんと行って来い。私は用事があるのー」

とか、言いながら教室のドアまで歩く。
そして、ドアを開けて

アルト「じゃ、頑張ってね〜ん」

とか言いながら、ダッシュしていった。
俺たちは、ドアの方向に走って向かった！！！！
が、そこには、もう誰もいなかった。

克「先生…逃げ足だけ速いな……」

勇「逃げ足だけやないけどね」

と、暫く何もない空間を見ていると

アルト「うっわ!!危ねえな!気をつけろよ!」

克「あ、まだ居ったんや…」

突然のアルトの声に反応する。

俺も。当の昔にどっかいったのかと思った。

勇「って、言うか……コレって、順番で見回りするんですか?」

扇「アルトもそんなこと言ってたし、そうなんじゃねえの?」

克「それやったら、勇が一番不利や。装備科やし」

はぁ…と溜息をつく俺たち。

ここで、教室のドアの方から足音が聞こえた。

扇「ア…アーサー?」

そこには、アーサーが居た。
それも、髪の毛がボサボサな……

ぶぶツ！！コイツ、何やってきたんだよｗｗｗｗ

克「どうしたんですか…（特にその頭）」

アーサー「キミ達の先生にやられたんだよ」

少し怒り気味に言う。が、やっぱり表情は変わっていない。
無表情。アーサーは、無表情なのだ。

………

あつはつは！！！！

つつーか、やべえ！！！！

なんで、髪直さねえんだよ！！

髪が、所々ぴよんぴよんとはねて寝起きの人みたいになっていた。
いや、寝起きの人よりも悪いかも

アーサー「何を笑っているんだ、志具原扇！」

キツ、と睨まれた！

扇「だって……お前、髪直せよ……！」

大声で笑う。

時雨や藤も笑いを堪えているように見える。

アーサー「くっ……仕方ない……」

と、手串で、髪を直し始めた。

勇「先生、鏡貸しましょうか？」

アーサー「いや、いい」

そう言えば、俺以外の生徒ってアーサーのことを「先生」って言うってな。

コイツ、どっかの先生なんだろうか？

第四話

扇「で、何しに来たんだ？」

俺が一番疑問に思った事を聞いてみた。
なんで、コイツが俺たちの教室に……

アーサー「この依頼の件だ。^{くだん}」

この依頼…星丘之山にでる、妖怪のことだ。
何かあるのか？？

アーサー「アルテに頼まれたものでな。」

アルテ??
ダレだそりゃ……

名前がアルトと似てるなあ……
なんて思っていたら、アーサーは喋りだした。

アーサー「私も同行しろとの事だ」

克「おお！」

勇「助かったあ……」

なんか知らねえけど、2人は喜んでいた。

別に、コイツが着いてこようが、着いてこまいが、関係ないだろうに。

勇「先生みたいな強い人が着いてきてくれるなんだ光栄です」

ペコリ、と頭を下げた。

アーサーは、やっぱり無表情だ。

扇「なあ、時雨。」

克「ん？なんや」

扇「コイツって、そんなに強いのか？」

克「お前！この前も教えたらうが！！この人は、「ヴァチカン最強の騎士」なんぞ！？」

扇「ふーん」

「ヴァチカン最強の騎士……
いまいち、分からないな。」

扇「そもそも、ヴァチカンってなに？」

克「はあ!？」

驚かれた。

いや、つつーか。引かれた。

克「ヴァチカンつつーんは、本とか漫画とかのヴァチカンとちゃー
て、「被魔師」の裏組織に当たる存在なんや!」

まあ、裏つつちゅー裏やないけどな。

と。意味が分からん。まず、裏の組織?そこはかつこいいけど。
どんだけ強いとかは分からんしなあ……

克「そもそも、この学校もヴァチカンの許可を得てやっとなるんや。
つつちゅーか、この学校の理事長が、ヴァチカンの騎士の一人で、ソ
レを踏まえてこの学校を創立したんや!」

扇「まず、ヴァチカンの騎士って何だ?それと、何人いるんだ?」

克「確か、引退したの含めて数えると、世界で10人。他に、強い
人や神の武器を持った者もいたが、中々協力してもらえなかったそ
うや。」

それと、ヴァチカンの騎士たちゅーんは、さっき言った組織の一番上のお方に認められた唯一の強い存在の事や」

扇「へえ……認められた……ねえ……」

世界で10人が……

その中で、最強って事は……

扇「結構スゲーじゃん!!」

克「今更か!!」

スゲーな……

扇「でも、なんで、そんな奴がここにきてんの?」

勇「あー、それ僕も知りたかったんですわぁ」

アーサー「私だけではないぞ。他の騎士も集まってきた」

克「ええ!? 本当ですか?」

いやー、俺が知りたいのはなんで集まってきたのか、なんだけどー。

アーサー「お前達は、聞いていないのか？黙示録の四騎士が復活しようとしているのを」

！！

父さんが言ってた、あの……

第五話

アーサー「…こんな時間だ……」

と、話も終わってないのに、時計を見て言う。

アーサー「時間を決めて、順番に見回りをするぞ。この依頼は、今日の9時から】だからな」

と、俺達は、依頼の紙を見る。

扇「…って、アレ??パトロールって今日だけ??」

よくよく見たら、今日の日付だけになっている。

そして、アーサーの言った通りに、9時からになっていた。

扇「でも、なんで…?」

勇「志具原くん、順番決めますよ?」

扇「お、おう!」

俺たちは、星丘之山に行くまでに役割分担をした。

9 : 0 0 } 1 1 : 0 0 藤

1 1 : 0 0 } 1 : 0 0 時雨

1 : 0 0 } 2 : 0 0 俺

らしい。

一応、アーサーは全部に着いていくって。

相当暇なんだろうな、コイツ。

第六話

扇「じゃ、俺の番来るまで寝とくわ！」

って、言う言葉を残して、俺は寝た。
その後、時雨たちが怒鳴っていたが、ソレは気にしない。

一応。

移動方法は、車。少し大きくて何日か過ごすのには、快適(?)な
くらいスペースがある。

俺は、車の中で寝ることにした。

一番目の藤は、武器は無し。

なんか、詠唱とかなんとかで出来るゆってた。

二番目出発予定の時雨は、弓矢を構えていた。
って、言うか弓矢を綺麗にしていた。

そして、俺。俺は、草薙剣。

貴重なものだから、肌身離さず持つてろ、って2人が言ってたから
一応持っている。

コレを手にした瞬間から、俺はそういうものが見えるようになった。
から、まあ。持つてても別にマイナスなポイントはないからいいけ
ど。

と、まあ。任務の為に張り切るのはいいけど。

2時間も歩くって言うのが面倒だ……本当、もう……

だから俺は、こうして寝ているのだが、この中でアーサーが一番ダ
ルイだろうなー

ずっと歩いて、寝れないって。

俺もいつかそんな事なくちゃいけないのか!?

……俺、被魔師なるの止めよっかなあ……

ドンッ!……!

扇「ったああああ!……!……!」

いきなり走った衝撃……!

俺は、その方向を見る。

克「お前の番ゆつとるやろーが!……!」

扇「痛えんだよ!……お前、俺を蹴っ飛ばして起こすのやめてくんね
え!……」

いい加減、痛えよ……!

っつーか、身が持たなくなるし……!

こいつ、殺す気満々だろ！？

克「お前が起きないのが悪いんや！それに、そんな大声出して、勇が起きたらどうするんや！？」

俺は、チラッと藤の方向を見る。
そしたら、ぐっすりねていた。

扇「オメーの方が声がおつきいわ！！」

車から降りながら言う。

アーサー「いくぞ」

扇「……おう」

なんか納得いかないが、仕方ない

俺は、歩き出した。

第七話

シーンと静まり返る、森。

静かだなあ．．．．．アーサーは無表情でめっちゃ姿勢よく歩いている．．．

軍隊の兵隊さんみたいだ．．

扇「はあ．．．お前疲れねえのかよ」

アーサー「なにがだ？」

扇「小5時間は歩きっぱなしだぞ」

ここで黙る。

いやいや、黙んなや！！

アーサー「それが．．．私の使命だからだ」

．．．．．

扇「前から思ってたんだけどさ」

アーサー「なんだ？」

扇「お前って、何かと任務重視だよな」

アーサー「どういうことだ？」

ピタリと立ち止まる。

さっきまで、立ち止まる様子は一つも伺えなかったのに。

扇「いやぁ・・・ほら。なんか、お前。任務の為なら自分なんて・・・ってタイプじゃん？そんなじゃあ、お前。いつかその身を滅ぼすことになるぞ？」

思ったままを言う。

別に心配なわけじゃねえ・・・

けど・・・まあ・・・

アーサー「ふっ、お前に励まされるほど落ちぶれちゃいない」

嘲笑う様に言う。そして歩き出す。
けど、やっぱり無表情。

この無表情は、任務に対する執着心からだ俺は考える。
ずっと前に、父さんに聞いた話。

「被魔師になるには、感情を捨てなければならない」

アーサーは、コレに従ったのかもしれない。

けど、父さんはソレと共にこんな事も言っていた。

「けど、被魔師にもやっぱり感情と言うのは必要なんだ。・・・
まあ、難しい話だけだな」

両立させなければならない。
それが、アーサーの場合できていないんだ。
・・・きつと。

アーサー「・・・ん？」

急に立ち止まるアーサー

扇「どうした？」

アーサーは森の奥の一点をじっと見つめていた。

アーサー「可笑しいな・・・さっきからある程度は被ってきたはずなのに・・・」

被ってきた？

もしかして、あの2人、妖怪に遭ったのか？？

そんな疑問も定か。

アーサーは、その森の奥に入っていた。

扇「ちょ、待てよ！！」

俺もそれに着いていった。

第八話

ズンズンと入っていく。

アーサー「（可笑しい・・・こんな大きな気・・・さっきまでにはなかったぞ？）」

は、と時計を見る。

高そうな時計だなあ・・・

俺も、携帯で時間を見る。

アレ・・・？さっきまで、1時30分もいってなかったのに・・・
今は、2時・・・可笑的いなあ・・・

そして、またアーサーが進む。

アーサー「志具原扇！！剣を抜いておけ！！」

そう言い、また進む。

俺は、渋々草薙を抜く。

そして、進んだ先にアーサーが立ち止まった。
目の前には、洞窟・・・

アーサー「ここからだ・・・」

扇「何が居るんだ？」

アーサー「これほどの気だ・・・きっと、ボスに違いない」

ボス・・・

それは、ここで悪戯（に）にしても過ぎるが（）をしている妖怪共の親玉・
・

扇「そういや、さっきからこの辺がピリピリしてたな」

そういうが否か。

アーサーは、洞窟の中に入っていった。

――なんだお前等！？

――敵か！？

――通すな！！

とかなんとか言う妖怪。

中々そんなものに会う機会もないので、少しは怖い。

アーサー「いいか？特別授業だ。よく聞いておけ。妖怪は恐れたら負けだ。畏れるなよ？」

扇「お、おう」

恐れてはいけない・・・？？

俺にはいまいち仕組みが分からなかったが、目の前に立ちふさがる妖怪たちに目をやった。

俺は、剣を鞘から抜く。

さっきまで、布で覆っていたが、アーサーが取れっというので渋々取ったアレだ。

一方のアーサーは、勇者の剣みたいな剣を腰から抜いた。

これが、エクスカリバー。

見ただけで分かる、圧倒感・・・草薙と同じくらいの価値を持つらしい。

アーサー「いくぞ」

目が冷たくなった。

無表情の上目が冷たくなった！！！！！！

周りの空気が凍りつきそうだ

扇「・・・・・・・・よっし！！」

久しぶりに、振るうか!!

そして、数百匹以上ともいわれる妖怪の前に立ちはだかる!!

第九話

精神を集中させる。

そして、目を開く。その時にはもう、妖怪は襲い掛かってきていた。

扇「おおおおお！！！」

草薙で空間を一刀両断する。

ソレとともに、聞こえる断末魔。

アーサーは無言で、何匹も倒していていた。

スラスラと倒していくスガタは、男の俺がみても美しく感じた。

時雨達がいていた通りだな。「戦う姿までもが美しく感じる」。

それが、奴アーサーらしい。

冷たく美しく高貴。

いやぁ・・・俺にはその価値は分かんなかったけど・・・

けど、こう言うのは、実感してみるものだな！

キィイイン！！！！

アーサー「余所見をするな」

俺に襲ってきた、妖怪を両断する。

疲れはない、超絶余裕だった。

扇「悪いな!!」

そして、俺も戦う。

最後に、一刀両断して、終わった。
本当。10分も掛からなかった。

扇「はあはあ………」

疲れた……

剣を鞘に収めながら、息を整える。

やっぱ、実戦は違うな!

と、アーサーに目を向ける。

扇「ぬお!まさかの、全然疲れてない!?!」

吃驚!!

顔は余裕でいやがる・・・

アーサー「何を言っている。行くぞ」

扇「おう」

こうして俺と、コイツはズンズンと奥に入っていった。

第十話

扇「アーサーまだあ？」

俺の目は夜行性。

なので暗い所は、全然大丈夫のつもり。

ゴンッ！！

アーサー「くっ！！」

まただ

・・・・・・・・・・・・・・・・

コイツ、目が夜行性に向いてない所為か、よく物にぶつかる。
戦いのときは、目を瞑っても大丈夫なのに・・・・・・
コイツ、天然か？

仕方ない。

扇「ん・・・・」

手を差し伸べる。

俺がエスコートしてやるよ！って、つもりで出した手だが……

ゴンッ！！

アーサー「つつう！！」

俺の手にすら気付いてないらしい……

コイツ、相当なバカだな^^

本当に仕方がない奴だな……俺は、自分から手を握ってやる。

こいつの手がめっちゃおっきかった。

アーサー「む……なにをする」

扇「なにをする、じゃねえよ！お前、ロクに歩けねエくせに」

アーサー「うるさい」

その声に感情が入ってないから、お前はアレなんだよ。

本当にアレだな、アレ。ん？アレって何かって？そりゃーお前。アレっていったらアレだよ。

扇「お、出口が見えてきたぞ」

出口って表現は少し違うかもしれない。

久しぶりの光が見えて、俺達の脚が早くなる。

・・・ん？

光？？今は、夜中のはずだが・・・

と、俺達はソコを抜けた。

第十一話

そこは、神々しい光が眩しいただつぴろい空間であつた。
その空間は、以前。草薙を手に入れたときの空間に似ている。

扇「おお・・・夜なのにすげえな」

アーサー「流石だな。コレほどだったら・・・」

と、あたりを見渡すアーサー。
何か言いかけて、黙る。

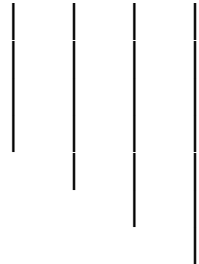
扇「どうした？」

アーサーの視線の先に、俺も目を向ける。
そこは、螺旋階段みたいになっていて、なんか・・・物凄い高さがある。

扇「登るのか？」

アーサー「そうだ」

無表情で、螺旋階段に近づいて、上る。
俺も負け時との乗る。



扇「はあはあはあ・・・」

つがれだああああ！！！！

もう、何分上っているだろうか・・・・・・

休憩なしに、ずーっと登り続けているうえ、上がる速度が速い。

アーサー「どうした？もう、へばったか」

扇「うるぜー」

アーサー「少しは体力面も鍛えろ」

お前に言われなくても分かってるよ！コノヤロー

は、と上を見る。あ、もうちょっとだ・・・！！！！

アーサー「・・・・・・・・・・」

そう思っている否か。

アーサーの顔が行き成り陰しくなった。そして、エクスカリバーにソツと手をかざす。
なんだ？敵か？？

そんなこんなで、後5段で、地上に着くという所までいった！！
はあ、ここまでの道のり辛かったぜ！！！！

扇「よぉーっし！とうちやくー！」

と、地上？に立とうと思った次の瞬間！！

アーサー「危ない！」

ドワッ！！

と、アーサーに、後頭部を蹴られた。

扇「ぶっ！！！！」

俺は、そのまま地面とキッス する事になった。
いや、キッス どころじゃない。鼻が！！！鼻がああああ！！！！

扇「つてええええええええええ！！！！！！テメエ、アーサー！！何しやがるんだよ！！！」

思いつき振り向く。

多分、鼻血でてる！！アイツ・・・なぐつてや・・・・・・・・る??

俺が、振り向けば。

後ろの壁が何かに切られたように割れていた。

扇「なんだアレ!？」

は、とアーサーをみると。なぜか息切れしていた。

アーサー「流石だな・・・・・・・・・・正体が分かったぞ」

扇「なんの？」

アーサー「ここのボス」

扇「マジか!？」

今の一撃で！？
すげえな！

扇「で、だれなんだ？」

アーサー「白面金毛九尾の狐
（はくめんこんもつきゅうびのきつ
ね）……………だ」

扇「九尾……………狐？」

第十二話

九尾狐・・・・・・・・

扇「九尾狐??」

俺は、恐る恐る最後の会談に足を置く。
そして、そこにいたのは・・・・・・・・

扇「でッ・・・・・・・・でっけえ!?!」

そこには、大きな狐がいた。
白くてきれいなみをした狐がいた。ドスンッと、横になってい
る。
と、横にアーサーがやってきた。

アーサー「お前が・・・白面金毛の九尾狐か?」

——なんじゃ、お主等

しゃ、喋った!!!

――妾に何かようか？

アーサーは、近づく。

――警戒はしたはずだぞ

警戒？

あの、顔面キッス か……………随分な警戒の仕方だな！！！！

アーサー「貴様に一つ問う。」

――なんじゃ

アーサー「人間をとって喰らっているのはお前か？」

シンツ、となる。

もう、エクスカリバーは抜いてある。

と、九尾狐はスツと、立つ。そして、

――オオオオオオオオオッ！！！！！！

と、ほえた。

それは、ズンツ！！と重くのしかかり、俺は剣を抜いてそれをカバ

ーした。

扇「くっ！！！！」

ズサササアアと、何メートルか軽く飛ばされる。
それは、アーサーも一緒だ。

アーサー「はあはあ……それは……敵意か？」

——はっ、ほざけ人間共が！！！！

コツチを見て睨む。

アーサー「志具原扇！！お前は逃げる。ココからは、真剣勝負だ。」

扇「はあ！？」

何言ってんだ！？

アーサー「これくらい、ヴァチカン最強の騎士の名にかけて……」

コイツ、何かって1人で背負って1人で戦おうとしてんだ？

俺は、そういいかけのアーサーの元へ行って、手をかざして、口をグツと塞いだ。

アーサー「むぐっ!？」

扇「なに1人でやろうとしてんだ。」

手を口にかざしたまま喋る。

扇「特別授業・・・なんだろ？」

アーサー「・・・・・・・・」

無表情の目が一瞬見開く。そして、目を細める。

扇「それに、俺には言い案がある」

ニヤリと、笑う。

——貴様等、思い上がるなよ!？

シャアアア!!--と、威嚇する。

アーサー「……………んぐぐ」

は、とアーサーの方を見ると苦しそうに顔が真っ青になっていた。

扇「お……と、悪い悪い」

アーサー「悪い、どころじゃないだろ」

キツ、と睨む。心なしか涙目だ。それほど苦しかったのだろう。
そして、エクスカリバーをこっちに構える。

扇「ま、まあまあ……今、争っても意味ねえだろ！？」と、とりあ
えず、剣下ろそうぜ」

アーサー「ふん………憶えてろよ」

ボソッ、と言いやがる。

第十三話

って、なワケで。

——なんだ!?

俺は近づく。

アーサー「ちょ、ま・・・」

俺は構わずに進む。

九尾狐は、こっちに威嚇ばかりをする。

そのたびに、大きな刃のような空気の波動が襲ってくる。

俺をギリギリに避けてくれるソレは、避ける必要はあまりなかった。しかし、当たるものは当たる。

扇「ッ・・・」

痛い、我慢!!!!!!

——くるな!!

ギャキイイイン!!!

草薙でカバーする。そして、隣にその波動がずれる。

アーサー「志具原扇!!!」

扇「だいじょーぶ」

そして、九尾狐の元へ行く。

——妾に近寄るなと言っておろう!!!

シャアア!!!

扇「お前、さびしかったんだろ」

——何を世迷言を!!!

扇「さびしかったし、人間に大切にされたかったんだろ?」

——何が大切にされたかっただ!!!

シャアア!!!と。

扇「それで、人間を襲ったんだろ？」

——うるさい！！妾を安心させてそのうちに襲う算段だろ！？

アーサー「狐を魔物、あるいは憑き物として語った伝承は日本だけでなく、古くから世界各地に残されている。九尾の狐もそうした狐にまつわる昔話のひとつであり、物語の多くでは悪しき霊的存在として登場するとされる。つまり、あまりよく思われる印象はない」

と、アーサーが言う。

そして、「それと」と続ける。

アーサー「紀元前2世紀から紀元3世紀頃にかけて中国で著された地理書『山海経』には実在とは思えぬ動植物の項が並んでいるが、その一書「南山経」で、青丘之山に「有獸焉 其？如狐而九尾 其音如嬰兒 能食人 食者不蠱」とあるのが九尾の狐に関する最初の記述であるとされる。

しかしその後、中国の各王朝の史書に、九尾の狐はしばしば瑞獣としてその姿を見せる。『周書』や『太平広記』など一部の伝承では天界より遣わされた神獣であると語られ、その場合は平安な世の中を迎える吉兆であり、幸福をもたらす象徴として描かれる。

また一方では、殷の帝辛（紂王）を誘惑して国を滅亡させた妲己や、南天竺耶竭陀国（古代インド西域）の王子・班足太子の妃になった華陽夫人、御伽草子『玉藻の草紙』に登場する玉藻前を例とするように九尾の狐は絶世の美女へ化身するという話も多いと言われる」

そう。

そう言う事だ。

いや、別にこの話は知らなかったけど・・・

ナイスフォローだ！！アーサー！

扇「で、ココからはあくまで俺の予想なんだけど。お前、昔。皆に愛でられてたんだろ。ココの洞窟に毎日捧げものとか持ってくる奴がいたんだろ？そんな時は、アーサーが最後に行ったほうの説を信じている人間が多かった。

しかし、今。この時代で、九尾狐と言えば、不吉なものとなる。そんな物に当り前なほどに、捧げ者なんて持つてくるものもないしましてや、愛でもしないだろう。」

頭の中に、どんどんとストーリーが浮かんでくる、

扇「で、寂しくなつて、人間を襲うようになった・・・。。。。だろ？」

—— 違っわ！！なぜ、妾が人間を欲さなければならぬ！？

扇「それは、お前が人間を誰よりもこよなく愛していたからだろ？」

—— はっ

暫くシン、となる空間。

——馬鹿なことを!!

扇「なら!なら、なんで俺を殺さない?お前の力なら、今すぐ」
で殺せるはずだ!」

アーサー「それに、さっきから動揺が隠せてないぞ」

そう。さっきから、必死に言う。
「違う」「違う」と。否定する。

第十四話

俺は、九尾狐と距離を縮める。

——う、うるさいわ!!

扇「ほら、この手を取れ。俺が、救ってやるよ。その寂しさから」

ニコツ、と笑う。

——なぜ、妾が!!

ザシユッ!!!

肩がやや切れる。痛い!!!が、我慢だ・・・

——確かに!!!妾は昔皆に愛でられていた。そのときに、妾は人間を愛できるようになった。それでも、人間は妾を裏切った!!!妾はあんなに尽くしたのに!豊作も幸福も、全て妾が与えた!!!だけど、裏切った!!!だから、もう二度と信じようとは思わなかった!!!

ザシュッ！！

今度は脇腹。痛い、痛い、痛い！！！！こんな怪我イツ振りだ！？アレ、小学生の頃、ナイフを持った高校生に切りつけられて帰りウチにしてやった以来だぜ！？

いや、まあ。あの時は、高校生の方が重症だったから、アレだったけど！

扇「ほら、本心がいえた。俺と一緒にいこうぜ？」

——うるさい！！！！！！

ああああ！！！！！！

もう、本当面倒臭え！！！！と、俺は草薙をバツと解き放つ。

扇「うるさいのはお前だ！！！！！！」

ドゥウウウウン！！！！！！

剣を振りかざしたその時。九尾狐の後ろの壁がバツクリと割れて外の景色が見えていた。

扇「だから、俺が救ってやるって言ってんじゃねえかああああああああああ！！！！！！」

今度は、ビュンツとグルリ一周回って剣を振りまわす。

その瞬間、その周りの石でできた建物がパツクリと割れまた外の景色が見えた。

扇「さあ、俺の元へ来い！！！」

今度は、天井を剣で突きした。

勿論、俺がその天井にいったのではなく。剣を空に刺しただけで切れたのだ。

うーん、切れ味抜群！！

——．．．．．妾は．．妾は今一度、人間を信じて言い
と言うのか？

扇「ああ、勿論だ！」

ニツ、と笑う。

と。九尾狐は、差し出した掌に顎をそつと置いた。

扇「お．．．」

——そうか、なら。今一度．．．．

信じてみようか

と、九尾狐は首に乗るサイズに小さくなった。

扇「おお！可愛い！！」

と、撫でる。

よしよし。可愛いなあ・・・と、アーサーが近寄ってきた。

アーサー「いい所ですまないんだが」

と、アーサーが。

ん？なんだ？？

扇「あ」

九尾狐は、アーサーの肩に飛び乗り頬つぺた舐める。

アーサー「んっ・・・」

と、少し言い、アーサーは九尾狐の首根っこを掴んで俺に渡した。
っっーか！！おのれえ、尻の軽い狐め！！

アーサー「この建物……崩れて着てるぞ」

扇「ふん、そうか」

建物が崩れているのか

-
-
-
-
-
-
-
- つて
- て

扇「ええええええええええええ！！？ヤベエじゃん！！」

アーサー「お前が、無闇やたらに切り裂くからだ！」

扇「仕方ねえだろおおお！？」

ぐあ！！

叫んだら、横っ腹と肩が痛くなった！！

アーサー「取り合えず、出るぞ!!」

扇「お、おう!!」

第一話

あああああああ！！！！！！！
痛い！！傷口が傷む！！

扇「いだいよ おおー」

アルト「黙れ！！」

扇「いだっ！！」

額にチヨークをぶつけられた。
別に授業中じゃねーだろ！！

アルト「あー、お前。アーサーから聞いたぞ。昨日は頑張ったってな」

扇「そう思うならチヨーク投げんな！！」

俺の名前は、志具原扇^{しぐはら せん}。

現役バリバリの高校生だが高校は行ってなく、
抜魔師専門塾に通っている高校生だ！！

勇「そうですよ、先生。あんまり虐めはつたら、志具原くん死にますえ」

克「それは大げさやろ」

コイツ等は、俺のクラスメイトの藤勇ふじいぐれと時雨克しぐれかつみだ。

アルト「で、今日はクラスメイトを紹介する」

「ええええええええええ！？」

俺以外の二人が叫ぶ。

克「先生！最初、俺たちに選ばしてくるいいはっ たんやないですか！？」

勇「そうですよ!!」

あ、
そうなんだ。

アルト「ばーか、コレはお前のクラスメイトの案だよ」

克「はあ?! 勇、お前か?」

勇「そんな!一緒に決めるいうたやないですか!?!」

と、なると・・・と、俺を見る。

扇「はあ?! 俺?? 違う違う!全然憶えないって!」

やはり、ジーと見てくる。
いやいや、絶対違うって!

アルト「まあ、ある意味全員かわりはあるぞ」

「「ええ??」」

更に分かんない!!という・・・

アルト「ま、実際見たほうが速いだろ。入れ」

と。ガラスとドアが開く。

勇「(女の子でありますように女の子でありますように女の子であ

りますように女に」

克「（また、コイツ変な事考えとるな・・・）」

第二話

入ってきたのは、どこかで見たことがある少女だった。

髪を少しだけ、前に出してその前に出している髪に包帯していて、後ろ髪を見れば長さは腰までだと分かった。前髪はパツツン。そして、肌が真っ白……。

扇「あああああ……！」

思い出した……！

他の二人を見ると、目を丸くしている。

扇「お前……沢田希……！」
さわだのぞみ

そう、いつぞや救った少女の霊。

希「いいや、違います。違いますよ、志具原さん」

敬語で丁寧に言う。

あ、そうだ……

崩「あ、そつか……お前の新しい名前……」

ニコツ、と笑う。

素直に思う。可愛いつて。

「私の名前は、崩月ほうつき 静しずか。よろしくお願いします!」

ペコリ、と頭を下げる。

勇「かわええええ!!」

克「な!アホか!」

勇「めっさ、美人やないですか!」

と、崩月の肩を両手で掴む。

静「えっと……その……」

頬を染める。

静「藤くん……その……近い……です」

克「離れえ！！！」

バシッと叩く。

勇「いったあい！！」

頭をさする。

静「あ、志具原さん！・・・あの時は有難う御座いました！！」

礼をする。

扇「いやいや、それほど」

静「あ、勿論お二方にも感謝してますよ！」

と、二人の方を向く。
愛想がいい奴だな。

克「そーいや、お前。何科なんだ？」

静「そうでした！私、多少の超能力は使えますが、皆様の救護に当たりたいと強く願うので、アンビュラス救護科にします！！」

勇「アンビュラス救護科ですかあ！崩月さんに介護されるなんて最高やないですか！」

静「いやぁ・・・」

恥ずかしそうに照れる。

第三話

って、言うか・・・ん??

扇「超能力??」

そう。彼女は今、「多少の超能力は使えますが」といったのだ。
超能力??

静「そうです！私、超能力者なんです！」

張り切って言う。・・・え??ええ

勇「崩月さんは、少し電波なんですか？」

克「電波ちゃう。」

ちょっと、頭がアレなや、とか・・・
コイツ、物凄く失礼だな！何だコイツ！

静「信じられないのは分かります。けど、ソレは本当です」

崩月は、言う。

いやいや……行き成り超能力者発言されても……俺が中学ん時にはこんな奴物凄くいたからなあだから、あんま信じられんだよなあ……

そもそもの話。

俺は、超能力者の存在を半信半疑にしている。

克「本当なんか？」

静「本当です！」

けど、その目は真実に満ちていた。

静「藤さんも時雨さんも信じてくれません！志具原さんは、信じてくれますか？」

扇「うーん……そうだなあ・俺。あんまそんな信じねえたちなんだけど……でも、お前は信じるよ」

うん。

2人に凄い目で見られてるけど気にしないのが俺のポリシー……！

静「志具原さん!!」

目が輝いている。

勇「ええ？なんか、根拠でもあるんですか？」

扇「いや、だって。こいつの目見てたら、信じなきゃって思って」

克「アホか！お前、そんなんやから、よー人に騙されたりするんや！このお人よし！」

扇「ああ！？お人よしで悪いかよ!？」

なんだコイツ!!

雰囲気悪いなあ!!!

それに、騙されてなんかねえって!!!

克「そこがもうアホなんや!」

はあ！？意味分からん!

なんで、アホなんだよ！気づかれていないうちに騙されてるとでも言いたいのか！

静「あ、あの……！」

と、喧嘩をしていると。

崩月がとめた。藤も留めていたが、眼中になかった^^

静「だったら、証拠を見せます……！」

決定的証拠だ！

第四話

と、崩月は、片手を空に翳した。

アルト「頑張れよ、練習どおり」

静「はい！」

こっちのほうを向く。

静「今から、天気を変えます」

克「はあ！？」

崩月が、空を向く。

室内だから、天井を向くことになるけど。

と、次の瞬間。

目が変わり、キイイイン！！と音がしたかと思うと（この音が聞こえたのは俺だけらしい）、天気が変わった。
さっきまで、快晴だった空に雲が翳ってきた。そして、

ゴロゴロゴロ

ドッカアアン！！！！

雷が落ちた！！

「！！！」

静「まだまだ！！今度は、この机を全て浮かします！！」

と、今度は両手を前に翳して、クイツと指を上げた。
次の瞬間。ドウツ！！と、全ての机が上がった。

静「次は、その机を潰します！！」

グチャッ！！！！

と、机が潰れる！！！！す、すげえ！！

静「時間を20分前に変えます！！」

と、今度は手を真横に広げて言う。
そして、次の瞬間。

キンコンコンと、チャイムが鳴った。
そして、時計を見るときつちり、20分前に戻っていた！！

静「今度は、私の事をちょいちょい気にかけてくれた恩人、アーサーさんをココにレポートします!!」

はぁ!?

と、今度は額に人差し指と薬指を当てて、もう片手はあいたスぺー
スに手を翳した。
そしたら

アーサー「ッ!?!」

「!!?!?!」

アルト「あにゃー・・・静あ、お前、相当レベルアップしてるな」

あ、アーサーだ!!!

吃驚する。しかし、真に吃驚した事は、そんな事じゃない!
アーサーの格好だ。

アルト「いつやーん・・・」

アーサー「・・・なんだ、崩月静の仕業か」

アルト「いやいや、お前。そんな事いつてる暇はないだろ」

と、アーサ自身を指差すアルト。
そう、アーサーは風呂上りなのか、腰にタオルを巻いて髪をタオルで拭いている途中だったのだ!!

静「あ!!!!え、ええええつと!!」

顔が真っ赤になっている。

アーサーの裸見て恥ずかしがってんのか??

アーサーは、無表情で全然表情を変えてない。
恥というものがないのか!

アルト「あつにゃー、やっぱり乙女には男性の裸は過激かにゃー??」

アルトの後ろに隠れる。

静「す、すすすすすみません!!!!!!」

ぺこりと頭を下げる。

アーサー「別に構わない」

うわっ！

なにコイツ！勇者かなんか！？

アーサー「それより……この天気も時間も机もソレも……
……崩月静、お前がやったものか？」

静「はい、すみません」

アーサー「いや……（それは構わない。しかし、こんなに使ったら、後から辛くなるのはアイツだぞ）」

静「（なんで？？……時間が変わったのは、ここの教室にいる人しか分からないはずなのに……）」

アーサーは、神妙な顔をする。

そして、頭にかぶさつてあるタオルでまた髪を拭きながら、教卓の机の隣の机の椅子に座る。

アーサー「崩月静、とにかく、これを全部元に戻せ」

無表情で言う。

静「はい」

静は、両手を翳した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4525w/>

祓魔師物語(えくそしすとすとーりー)【第二巻】

2011年12月17日13時08分発行